

学力研究への視角

■
耳塚 寛明

◇学力の水準問題

警察を舞台にしたある小説に、警官が犯人との電話での会話から犯人像を推定する場面が出てくる。犯人は正確な日本語を使っていたので教育水準は高い、大卒あるいは院を出ているかもしれないというのである。やや乱暴ながら日本語運用能力を「学力」と置き換えれば、ここには高学歴者は高学力であるという、私たちの機能的学歴観が如実にあらわになっている。

ここ10年近く学力の社会学的研究に携わってきた。なぜ私にとって学力が問題であったのかといえば、はじめ学力の「水準問題」（学力低下論）に端を発し、後に「格差問題」へと関心に移った。水準問題としての学力への関心は、多分に学力の技術機能的前提に由来し、先に述べた警官の学歴観にも重なる。今世紀初頭の学力低下論者たちの指摘がそうであったように、学力水準が低下すれば社会全体の科学と技術の水準が低下し、学術・経済・文化など多側面にわたって社会進歩に支障を来すといった危機感が背景にあった。

◇学力の格差問題

他方、格差問題としての学力への関心は、技術機能的前提が経済学的議論の範疇に属するのと比してより社会学的で、より知的関心を誘う。学力格差の大きさは拡大しているのか、格差拡大はなにがもたらしているのか、その社会的帰結は如何。これらの問いを掲げることは、社会構造そのものの問い直しを意味する。私たちの社会はメリトクラシー（業績主義社会）を是として制度化され組織されている。教育の世界であれ職業世界であれ、人々の選抜や処遇においてメリトクラティックな原理が貫徹されていれば（あるいはそう人々が認識していれば）、学力格差やその結果としての社会的報酬分配上の格差は「正当化」される。その場合、学力「格差」は学力の「差異」と読み替

えたほうがよい。格差は差異が正当なものではないと糾弾する言葉だからである。

しかし、人々が選抜される際の基準たるメリット（学力や学歴）が、人々の生まれ（社会階層、家庭的背景）によって形作られているとしたらどうか。学力と学歴による選抜は生まれによる選抜と同義となり、業績主義的選抜は人々の身分や社会的出自に基づく属性主義的選抜（ascription）となんらかわらないこととなる。イギリスの社会学者マイケル・ヤングの社会科学的SF小説『メリトクラシーの勃興』が描いたのは、業績主義社会のかかえるこのパラドックスだった。そしていま学力の社会学における、もっとも現代的でホットな問題がこれである。学力格差への視角が見せてくれるのは、そういう業績主義社会の脆弱性である。メリットの中に属性主義が混入した社会では、学力と学歴は、特定の生まれの人々を排除する仕掛けとして機能することになる。

◇学力の“うさんくささ”をこえて

学力格差の社会学があらわにしているのは、言葉をかえていえば学力の“うさんくささ”にほかならない。しかしそのうさんくさを承知しつつ、教育界は学力を測定し、努力を促し、選抜に利用し続ける。大学人も例外ではない。むろん職業世界も、程度の差こそあれ、テストを利用し、学歴別に採用枠を設け、ときに学校歴ブランドを尊重した選考を行う。

この隘路を抜け出すための道はどこにあるのか。そのためには、これまで学力の社会学が避けてきた問い——学力とはいったいなんであるのかという問いに、正面から立ち向かってみる必要性を感じている。それは学力の技術機能的価値との対決にほかならない。

（みづつか・ひろあき お茶の水女子大学教授）